

『荒涼館』における名前と暴力

宮川和子

序

Charles Dickens の最高傑作と言われる『荒涼館』(Bleak House)は、Vladimir Nabokov が指摘しているように、三つの大きなテーマで構成されている。¹一つは、大法官裁判所のテーマであり、Jarndyce 対 Jarndyce 事件という延々と続く訴訟を通じて、その馬鹿らしさが描かれる。二つ目は、親に見捨てられた可哀想な子供たちを扱ったテーマであり、彼らの両親はたいてい詐欺師か、化け物じみた存在として描かれている。三つ目は、ミステリーのテーマである。探偵もどきの登場人物たちによって、主人公 Esther Summerson の母親 Lady Dedlock の過去が次第に暴かれ謎が解き明かされてゆく。

この三つのテーマに共通しているのは、目に見えない暴力である。いつまでも長引く訴訟という不合理な制度がもつ暴力によって、金銭とエネルギーが吸い込まれて行き、人生をめちゃくちゃにされてしまう犠牲者たちと、そういう制度を代表する弁護士たちが描かれている。さらに、親の子供たちに対する目に見えない暴力と、そして最後に、個人のスキャンダルを暴き立てようとする集団の視線という暴力が問題にされている。

こうした様々な種類の暴力を明らかにする鍵の一つとして「名前」がどのように扱われているかを通して『荒涼館』における暴力を論じたい。

1 Miss Flite と小鳥の名前の関係

長引く訴訟で人生を破滅させられ、頭が狂った女性 Miss Flite と彼女の飼っている数多くの小鳥たちとの関係の中で、どのような暴力が働いているのかをまず考察したい。Miss Flite は小鳥たちに名前をつけているが、“Another time, I’ll tell you their names. Not at present.”²とってなかなかその名前を教えようとはしない。そのことについては、下宿の大家である Krook も“It’s one of her strange ways, that she’ll never tell the names of these birds if she can help it, though she named ’em all.”(253)と述べている。しかし、“Shall I run ’em over, Flite?”(253)と尋ねて、Krook は次のように小鳥たちの名前を声に出して列挙する。

“Hope, Joy, Youth, Peace, Rest, Life, Dust, Ashes, Waste, Want, Ruin, Despair, Madness, Death, Cunning, Folly, Words, Wigs, Rags, Sheepskin, Plunder, Precedent, Jargon, Gammon, and Spinach.”
(253)

これらの小鳥の名前についての、J. Hillis Miller の分析によると、³ “Hope, Joy, Youth, Peace, Rest, Life” は大法官裁判所における訴訟で犠牲になったものを表し、“Dust, Ashes, Waste, Want, Ruin, Despair, Madness, Death,”は、訴訟の結果を表している。さらに、“Cunning, Folly, Words, Wigs, Rags, Sheepskin, Plunder, Precedent, Jargon, Gammon, and Spinach”は訴訟や制度といった魔物を作り出す道具、もしくはその性質のことである。

このように小鳥たちと訴訟とは何の関係もないのであるが、訴訟と関連する名前が与えられていることに注目したい。ここには、Jacques Derrida が *Of Grammatology* の中で論ずる“the originary violence of language”⁴の一つの例が見られる。Derrida は、「名付ける」ということの中に、独自のものを体系の中に刻み込みクラス分けするという形の暴力が存在することを指摘し、この暴力を“arche-violence” (原暴力)⁵と呼んでいる。Miss Flite の場合は、名付けることによって、すべての小鳥を「訴訟の犠牲」「訴訟の結果」「訴訟や制度を作り出す道具あるいは性質」というようにクラス分けしているのである。言い換えれば、小鳥の名前と小鳥固有のものが一致しないのに、無理に一致させようとして生ずる暴力であると考えられる。⁶

さらに、今述べた“*arche-violence*”に加え、Derrida は第二、第三の暴力についても論じている。すなわち、“*moral*”⁷を設定し、すでに固有なものを引き裂いているいわゆる「固有名詞」の抹消と抹殺を命ずるといふ第二の暴力。そして、固有なものから本性を奪いクラス分けするという「原暴力」を暴きたて、固有なものとして機能していたものをむき出しにするという第三の暴力である。

Miss Flite の場合も、Krook の言う“*one of her strange ways*”、言い換えれば彼女なりの“*moral*”を設定し小鳥たちの名前を隠そうとしている。これは、Derrida の言う第二の暴力に近い。そして、Krook が名前を暴露する行為は第三の暴力に相当するであろう。Miss Flite と小鳥たちの間にすでに存在していたはずの“*the intimacy of proper names*” (固有名詞の親密性)⁸が Krook によって無理にこじあけられ、Miss Flite の小鳥たちに対する親密な関係、他者には容易に踏み込まれたくない領域のようなものが土足で踏みにじられている。

今述べたような、名づけるということに関連する三つの暴力、すなわち名づけることそのものにある暴力、名前の抹殺を強いるという暴力、そして隠されていた名前を他者に暴露するという暴力は、『荒涼館』の中で現れ、ときにはプロットを中心に成すほど重要な要素となっている。⁹具体例にあたりながら、さらに論を展開させたい。

2 親子関係に現れる名づけの暴力

ここでは、親子の間において見出される名前と暴力の関係について見てゆきたい。例えば、Esther の友人である Caddy は、母親の Jellyby 夫人に筆記者としてこき使われている。Jellyby 夫人はアフリカで、慈善事業を組織することに専念するあまり、娘がインクだらけのひどい有り様になっていても気にかけることはない。Caddy は怒ってこう言う。“*I am only pen and ink to her.*”(240) この“Caddy”という言葉は二重の意味をもっている。一つは人間の名前であるが、もう一つは紅茶を入れる缶という意味である。つまり、キャディは彼女の名前によって、道具もしくは何か有用なものとしてクラス分けされているのであり、彼女はアイデンティティを剥奪されている。

Caddy の婚約者である Prince もまた、父親の Old Turveydrop の犠牲者である。Old Turveydrop は決して働かず、自分の行儀作法のすばらしさを鼻にかけている。いつもおしゃれで高価な服を身に着けている。父親とは逆に、息子の Prince はダンス教師として懸命に働き、着ているものは質素でみすばらしいものである。Esther はダンス学院を訪れ、Old Turveydrop が「行儀作法の手本よろしく」暖炉の前に立っているだけであるのを見る。エスタは、たまたまそこに居合わせた老婦人が次のように語るのを耳にする。

‘And he never does anything else,’ said the old lady of the censorious countenance. ‘Yet would you believe that it’s *his* name on the door-plate?’

‘His son’s name is the same, you know,’ said I.

‘He wouldn’t let his son have any name, if he could take it from him,’ returned the old lady. (244)

「名前だっけととり上げてしまう」という表現から、Old Turveydrop がいかに息子を搾取しているかということが明らかになる。

さらに、“Prince”という名前もまた、Old Turveydrop の利己主義と関係がある。Caddy の説明によれば、Old Turveydrop が摂政宮殿下の記念に Prince という名前をつけたのである。Old Turveydrop は、行儀作法に通じていた摂政宮殿下を崇拜していたからである。つまり、“Prince”という名前は、Old Turveydrop の息子とは何の関係もなく、ただ Old Turveydrop の自己満足のためだけにつけられたのだ。Caddy は Prince という名前について“*it sounds like a dog.*”(240)と言う。すなわち、Old Turveydrop は、犬に名前を付けるように、息子に名前を付けたというわけである。かくして、Old Turveydrop の息子は、人間のカテゴリーから排除されたようになり、事実、Old Turveydrop に犬のようにこき使われている。このように、名付けるということに、時として目に見えない暴力が潜んでいることがあるのだとわか

る。

このような原則は Skimpole のケースにも当てはまるであろう。彼の三人の娘、Arethusa, Laura, Kitty はニックネームで呼ばれている。そのニックネームとは“my Beauty daughter,” “my Sentiment daughter,” “my Comedy daughter,”すなわち、「美」の娘、「感情」の娘、「喜劇」の娘である。各々の娘は「美」「感情」「喜劇」という役割を割り当てられて、まるで Skimpole の“playthings”(654)であるかのように扱われている。彼女たちの髪形も Skimpole の趣味に応じて決められている。ここで Esther のコメントを紹介する。

His pictorial tastes were consulted, I observed, in their respective styles of wearing their hair; the Beauty daughter being in the classic manner; the Sentiment daughter luxuriant and flowing; and the Comedy daughter in the arch style, with a good deal of sprightly forehead, and vivacious little curls dotted about the corners of her eyes. They were dressed to correspond, though in a most untidy and negligent way. (654-655)

かくして、三人の娘たちは父親 Skimpole によって「おもちゃ」のカテゴリーに入れられるのである。

Bagnet 家の三人の子供たちについてはどうであろうか。彼らは、Quebec, Malta, Woolwich と呼ばれているが、それぞれの名前の土地の兵営で生まれたからである。つまり、彼らは、出生地によってクラス分けされているのであり、何かスーパーマーケットの野菜が産地によって分類されるのに似て機械的である。

さて、次に Esther のニックネームに関して考察し、Esther と後見人である Jarndyce 氏との関係を、William Axton による研究を手がかりに見てみたい。彼によると、Esther のニックネームと Esther の性格・個人的な状況・小説内の役割が関連性を持っている。¹⁰ Esther が荒涼館に到着してすぐに、後見人である Jarndyce 氏と初めて一対一の話し合いの場をもつ。その後、Esther は種々多様なニックネームで呼ばれることとなる。

This was the beginning of my being called Old Woman, and Little Old Woman, and Cobweb, and Mrs Shipton, and Mother Hubbard, and Dame Durden, and so many names of the sort, that my own name soon became quite lost among them. (148)

William Axton によれば、「Esther のニックネームは Esther からアイデンティティと個人としての地位を奪い取り、彼女をハウスキーパーという相対的な匿名性へと還元しているのだ」とする。¹¹ さらに、Esther のニックネームは一律に民間伝承やマザー・グースに出て来る魔女、鬼婆、おばあさん、未亡人を指しているのだとも述べている。例えば、“Mother Hubbard” “Dame Durden” というのは、孤児や動物たちの母親代わりとして世話をする老婆の名前である。これは、Ada や Richard のような孤児たちに対して、Esther が母親のような役割を与えられていることと対応する。

とりわけ、“Dame Durden”に関して述べるならば、夫がほしくてたまらないのに相手がなく、周りの人はどんどん恋人が見つかってゆくというストーリーをもつ。Esther の周りでも、友人たちはどんどんパートナーを見つけてゆくが、Esther 自身は、あたかも自分が恋愛から排除されているかのように感じている。

次に、“Little Old Woman”と“Cobweb”というニックネームについても考えたい。これらは、作品中に引用される子供の歌“Little old woman, and whither so high?” “To sweep the cobwebs out of the sky.”(148)という歌の中に出てくる言葉である。この歌の内容は Esther の役割にぴったり合っている。すなわち、「荒涼館」に活発さと秩序を取り戻すという役割である。

最後に、“Mrs Shipton”というの、16世紀の魔女の名前である。その特徴は醜いということと、悪魔の子であるという評判をもつということ、そして、予知能力をもつということである。この「醜さ」

と「悪魔の子であるという評判」は、自分が人から愛されていないという Esther の恐怖心につながっている。

Esther がこうしたニックネームを与えられることで、ニックネームと関係する役割、つまり、母親役や有能な家政婦役が押し付けられており、Esther が本来の自分自身であろうとすることの妨げとなっていることがわかる。¹²

ここで論じた Caddy, Prince, Skimpole の娘たちのニックネーム、そして Esther のニックネーム について共通して言えるのは、登場人物の名前と登場人物固有のものが必ずしも一致しないのに、暴力的に一致させ役割を押し付けようとしている点である。このことは、Miss Flite が小鳥たちに訴訟関連の名前をつけた上に、判決が下るまではかごの中にいつまでも閉じ込めているのに似ている。

3 形骸化した名前、形骸化した制度・団体

名前だけが存在して実体のないケースもある。つまり、「名づけるということ」にクラス分けの暴力が存在することは先に述べたが、この機能を利用して名前だけをもち、自らを権威のあるもののカテゴリーに入れて権力を濫用しているケースである。

最初に挙げる例は慈善家の団体と個人との関係についてである。団体の名前を巧みに使用することで、金銭を搾り取ろうとする人々が描かれている。Esther の後見人である Jamdyce 氏に宛てて手紙の山がどっさり届くが、それらは慈善事業にたくさんのお金を寄付するように頼んだものである。手紙の差し出し人はみな、自分たちの委員会を作り上げ、実にたくさんのお金を使っている。それは、例えば「イギリス婦人会」「ブリテン処女会」「基本徳目のひとつひとつを名にした姉妹会」「アメリカ女性会」というように「何百という名前の淑女会」を名乗っている。こうして、手紙の送り手たちは、自らを女性の団体というカテゴリーに分類し、大量の金銭を要求するのである。

Esther は彼らのことを“this rapacious benevolence”(150)という表現を使って非難している。この点に関して、Bruce Robbins は、「集団を、まるで責任のある個人であるかのように扱うという原則が存在している」¹³と論じている。この点において、これらの集団は大法官裁判所に似ていると言えよう。大法官裁判所もまた、訴訟に係わる人々からエネルギーと金銭を奪い取り、しかも責任ある個人をシステム全体と区別できないようにしているからである。すなわち、慈善団体も裁判所制度も名前だけがあって実体がかめない幽霊のごときものとして批判されているのである。

次に政治家の名前の場合を考察しよう。名前だけがあって実体がないということが、名前そのものに現れているケースである。“Coodle, Doodle, Poodle, Quoodle, Buffy, Cuffy, Duffy, Fuffy, Guffy”といった名前が出てくるが、これらの名前は“C, D, P, Qu”に“oodle”を付け加えたり、アルファベット文字の“B, C, D, F, G”に“uffy”を付け加えたりすることによって作られたものである。Jamdyce が裁判所制度を批判するときに引き合いに出されたマザー・グースに出てくる“the history of the Apple Pie”(146)のようなものとなる。

“A was an apple-pie; / B bit it, / C cut it, / D dealt it, / E eat it, / F fought for it, / G got it, / I inspected it, / J jumped for it, / K kept it, / L longed for it, / M mourned for it, / N nodded at it,…”¹⁴

歌の中では、アルファベットの文字が順番に頭文字として使われ、つなぎあわされているが、a, b, c…と順番に続けてゆく必然性は何もない。すなわち、各文字が別の文字と交換可能だということになる。同様に、Coodle 以下の政治家たちの名前もまた J. Hillis Miller が指摘しているように「各人が他の誰にでも交換可能」¹⁵であるということを示唆しており、政治が中身の空ろな形式主義へと墮していることが批判されている。

次に挙げる例は、法律を巧みに利用する弁護士 Vholes とその犠牲者 Richard との関係についてのものである。顧問弁護士の Vholes は、“a good name”(590)を残すという口実のもとに、Richard を搾取する。Vholes は Esther に自分には三人の娘がいることを述べ、「生きていうちに義務を遂行して、死

後娘たちに良い名前を残す」ことを願っているのだと告げる。この場合、「生きているうちに義務を遂行する」というのはどういうことなのであろうか。それは、要するに訴訟に勝ってたくさんの利益を得ると期待を Richard に抱かせるということ、そして Richard の訴訟に対する興味を持続させるように努力すること、その結果として、Richard からたくさんの金銭をしばり取れるようにするということである。すなわち自分の家族を裕福で名誉ある家柄のカテゴリーに入れるために Richard を搾取しているのである。

Vholes は Richard の名前を口にするとき、その名字を“Mr Carstone”から“Mr C”つまりアルファベットの三番目に敬称をつけたものへと縮小するようになる。Richard が Vholes にとってはアルファベットの C にしか過ぎないということであろう。先ほどあげた“the history of the Apple Pie”のように A でも B でも D でもどんな文字にでも交換可能なものであり、Vholes にとっては Richard が Richard である必然性は何もなく、ただ金づるにさえなればそれでよいのである。結局、このアルファベットの三番目の C という文字が消しゴムで消されるようにリチャードは訴訟に疲れ果てその命も消されてしまう。

このように対象を、記号表現だけがあって記号内容がないものとして扱うのも暴力である。さらに、記号内容がなく記号表現だけがある政治家の名前は政治の空疎化を象徴している。慈善団体の名前のように、名前に伴う責任や義務がはっきりせず利益を得るためだけに名前を利用している場合もあることがわかる。

4 Hawdon の名前の抹消と暴露

次に、Derrida の論ずる第二の暴力である名前の抹殺と第三の暴力である名前の暴露について考察したい。この二つの暴力はこの作品のミステリーのプロット上で重要である。ラテン語で“no one”を意味する Nemo という名前をもった人物が登場するが、この Nemo というのももちろん仮の名前であり、本名は Hawdon である。若い頃、陸軍大尉であった彼は Honoria という女性と婚約するが、その後溺死したものと誤って公式に報告される。Honoria は Sir Leicester と結婚し、准男爵夫人、つまり Lady Dedlock となる。

こうした経過から Hawdon は、存在するが不在のものとしてされてしまい、社会から名前の抹殺を命ぜられたも同然となる。この「名前の抹消」という暴力は、Honoria が Hawdon との間に設けていた娘 Esther にまで及び、彼女は Esther Hawdon ではなく Esther Summerson という名前で生きてゆくこととなる。このことは Esther に罪悪感を抱かせ、アイデンティティの混乱をもたらす。

“I had never heard my mama spoken of. I had never heard of my papa either...I had never been shown my mama’s grave. I had never been told where it was.”(63)と語るように親がどのような人間かわからず、生きているのか死んでいるのかさえ不明である。“My birthday was the most melancholy day at home, in the whole year.”(64)という言葉からは生まれたことへの罪の意識が感じられる。

大人になってから、実の母親である Lady Dedlock に出会い、彼女の手紙から Esther は母親から故意に捨てられたのではないと知る。Esther は生まれてすぐに死んだものと Lady Dedlock は思い込まされていたのだと知って、Esther は次のように考える。

“So strangely did I hold my place in this world, that, until within a short time back, I had never, to my own mother’s knowledge, breathed - had been buried - had never been endowed with life - had never borne a name”(569)

このように Esther は実の母親の思考の中ですら場所も名前も与えられず、いわば生きたまま埋葬されていたのである。Esther は自分を“the danger and the possible disgrace of my own mother, and of a proud family name”(569)と見なし、生まれてこないほうがよかったとさえ考える。母親の名誉や Dedlock 一族の名前を汚さないという大義名分のために Hawdon という名前を抹殺され、存在まで否定されている。これこそが、Derrida の言う第二の暴力であり、共同体の設定した“moral”のために名前の抹殺を命じら

れているのである。

「名前の抹殺」の次には「名前の暴露」という第三の暴力が現れる。Estherの父親の名前がHawdonであることがやがて暴露される。この名前にまつわるすべての秘密はGuppyやSmallweed, Tulkinghornらの調査によって明らかとなり、Lady Dedlockの夫であるSir Leicesterの知るところとなる。Lady Dedlockは窮地に追い詰められる。彼女が昔、恋人との間に密かに一児を設けていたというスキャンダルが暴露された上に、殺人の容疑者にまでなっているのだと知る場面では、次のような語りが入る。

So! All is broken down. Her name is in these many mouths, her husband knows his wrongs, her shame will be published – may be spreading while she thinks about it -... (815) (emphasis added)

ここで、“name”と“shame”が韻を踏んでいるのはおもしろい。このことから、これら二つのことば“name”と“shame”が互いに密接な関係を持ち合っていることがわかる。“name”に執着することによって、しばしば“shame”へと導かれるのであり、時には、Lady Dedlockのように“death”にまで導かれる。Lady Dedlockは、Dedlock家の屋敷から逃亡し、Hawdonの墓のそばで死ぬ。Lady Dedlockのファースト・ネームである“Honor”の綴り（つまりH,O,N,O,R,I,A）の中には、H,O,N,O,R-“honor”（名誉）という言葉の綴りが含まれているのもまた皮肉なことである。すなわち、彼女は自分の名前によって命を奪われたということになる。

この事件が引き金となりSir Leicesterは健康を著しく損ない、その後Dedlock一族の衰亡はどんどん早まる。Lady Dedlockの墓を訪れるSir Leicesterの馬上の姿は“invalided, bent, and almost blind”(928)と述べられている。Dedlock一族の威光は、ある意味でLady Dedlockの過去の抹殺、つまりHawdonという名前の抹殺の上に成立していたのであり、いったんHawdonという名前がむき出しにされるや一気に落ちぶれてしまう。“Dedlock”という名前にも最初からその運命は暗示されていたのである。先に述べた“name”と“shame”という語には“a”の文字が含まれているが、この“a”を“e”のあとに挿入すると“Deadlock”すなわち「どん詰まり」という意味になり、衰亡の一族のカテゴリーに最初から入れられていたのだとわかる。

5 Tom-all-Alone’sの住人たちの名前の抹消

Tom-all-Alone’sの住人たちは社会的に追放されているも同然である。医療もまともに受けられず熱病患者が一人出ると続いて何十人も死者が出る。衛生状態がひどく行政から放置されたままである。

“Mr Snagsby passes along the middle of a villainous street, undrained, unventilated, deep in black mud and corrupt water – though the roads are dry elsewhere - and reeking with such smells and sights that he, who has lived in London all his life, can scarce believe his senses.”(364)

ロンドンに住むSnagsbyには信じられないほど不潔で荒廃した光景であり、“the infernal gulf”(364)へ降りてゆくように感じる。この通りに住む人たちにとって名前が一体どんな意味をもつであろうか。名前は今まで見てきたように制度や権力と密着したものである。彼らは本名を使わず、ニックネームで呼び合っている。

As few people are known in Tom-all-Alone’s by any Christian sign, there is much reference to Mr Snagsby whether he means Carrots, or the Colonel, or Gallows, or Young Chisel, or Terrier Tip, or Lanky, or the Brick. (365)

このように、Tom-all-Alone’sの住人たちが名前を使わず、ニックネームで呼び合うのは、制度からも権力からも完全に見捨てられ、社会のどのクラスからも排除されているということを象徴的に表して

いるのである。権力や組織の管理から外れてしまい、彼らの身元を確認する必要がなくなっているということでもある。つまり、社会的に見捨てられた結果、名前を抹殺されたのも同然になっているのである。

道路掃除の少年 Jo もまた“Toughy” “the Tough Subject”と呼ばれているが、彼の場合も名前が社会的にほとんど意味をもたなくなっていることを表しているであろう。さらに、Jo が family name をもたないのは彼が天涯孤独の身の上であることを示している。しかも、“Jo”という名前は、本来ならば“Joe”と綴られるべき名前であるが、最後の“e”の文字が落ちてしまっている。このことは、名前が抹消されつつある、つまり社会的に排除され、抹殺されつつあるということを象徴的に示しているとも考えられる。

最後に、“Tom-all-Alone’s”という通りの名前についても考察したい。まず“Tom”という名前は作品中に二度現れる。一度目は、訴訟事件に追い詰められて発狂し自殺した Tom Jarndyce の名前である。二度目は、父親である執達吏の Coavinses が死んでから孤児となった Tom の名前である。この二人の名前から、理不尽な制度・社会の犠牲者というイメージや、見捨てられたあわれな子供のイメージが浮かび上がり、Tom-all-Alone’s の住人たちの置かれている状況につながってゆく。さらに、“all-Alone’s”の部分について言えば、「皆が一人ぼっち」という意味をもち、これもまた Tom-all-Alone’s の住人たちの孤独な境遇を表していると考えられる。つまり個々の住人は名前を剥奪されたも同然の状況にありながら、その住人たちが住んでいる場所の名前は実質をもち、悲惨な状況を告発し、改善を叫んでいるのだとも言えよう。

6 George の名前を削除しようとする試み

次に自ら好んで自分の名前を抹消しようとする George の場合を見てみよう。George は自分の名前をすすんで遺言書から削除しようとする。George は兄に会いに、兄の経営する鉄工場を訪問するが、最初のあいだは自分の身元を隠すために“Steel”(鋼鉄)という偽の名前をでっちあげて名乗る。兄に正体を見破られるものの、George は“how is my mother to be got to scratch me?”(905)と言って、母親の遺言状から自分の名前を削り取ってもらう方法を訊ねる。その理由については“I have not sneaked home to rob your children, if not yourself, brother, of your rights. I, who forfeited mine long ago!”(905)と説明するように、放蕩息子であった自分が家へ舞い戻っても、兄や兄の子供たちの権利を侵害したくないからである。兄は、George が自分で遺言状を書いて、相続したものをすべて思いどおりに処分すればよいと忠告する。

George が自分の名前を削除して権利を放棄しようとするのは、実体の空ろな政治家たちや大法官裁判所がいれば名前を盾に権威を振りかざし、弱者を搾取しているのと対照的と言える。George のような登場人物が描かれることによって、小説の中に現れる様々な共同体の愚劣さが戯画的に示されているのだとも言える。一方で、George が名前を自ら意志的に抹消し、名前の呪縛から逃れようとしていることによって、むしろ名前のもつ呪縛力の恐ろしさを浮かび上がらせているとも言えよう。

結び

かくして、名前を考察することで、名付けることに存在する、目に見えない暴力が明らかにされた。特にそれは親子関係に見出されやすく、名前やニックネームを与えることによって、それらと関連した役割を演じるよう強制したり、自由やアイデンティティを剥奪したりすることもある。さらに、名前だけで実体のない制度や団体が、名前を利用して利益を得ようとする場合もある。名前が権力と結びつき、名誉や地位と結び付くことも明らかにされた。そのために名前を抹消され社会的に追放される Nemo のような人物がいる。いったん抹消された名前が Tulkithorn から他者の介入によってむき出しにされ、死へと駆り立てられる Lady Dedlock のような人物もいる。

最後に『荒涼館』の中の名前に関する一つのエピソードを思い出したい。息子の誕生日に Mr Bagnet は次のような「教義問答」を試みる。“What is your name? and Who gave you that name?”(722)という風に第一、第二の質問はスムーズに行くが、途中で記憶が怪しくなり、第三の質問は“*And how do you like that*

name?”というように代えられる。この三番目の質問からは、名前は親が一方的につけるが、実は子供は自分の名前を本当に気に入っているのだろうかという配慮が感じられる。名づけるという行為を、名づける側からではなく、名づけられる側から見ればどうなるかということへの問題提起となっているであろう。

註

¹ Vladimir Nabokov, “*Bleak House*,” in *Lectures on Literature*, ed. Fredson Bowers (New York and London: Harcourt Brace & Company, 1980), p.69.

² Charles Dickens, *Bleak House* (Harmondsworth: Penguin Books Ltd., 1971), p.105. 以下、本書からの引用は括弧内にページ数を示す。

³ J. Hillis Miller, “Interpretation in Dickens’s *Bleak House*” in *Victorian Subjects* (Durham: Durham University Press, 1991), p.189.

⁴ Jacques Derrida, *Of Grammatology*, trans. Gayatri Chakravorty Spivak (Baltimore: The John Hopkins University Press, 1976), p.112.

Derrida は Claude Lévi-Strauss が遭遇したナンビクワラ族のエピソードを引き合いに出し、それを分析・批判するという形で名前にまつわる暴力を論じている。エピソードを簡単に紹介すると、ナンビクワラ族のもとでは固有名詞の使用が禁止されているが、あるきっかけで子供たちの名前がすべて暴露されるということが起こる。それを知った大人たちに叱られて元の秩序に戻るといふものである。詳しくは“On the line” in *Tristes Tropiques*, trans. John and Doreen Weightman (New York: Penguin Books USA Inc., 1992), pp.278-279.を参照されたい。

⁵ Derrida, *op. cit.*, p.112.

⁶ Michael Ragussis は、名前と場所の相違、シニフィアン（記号表現）とシニフィエ（記号内容）の相違がこの小説の言語のあらゆる相に影響を与えていること、名前と人間の不一致は、名前と場所の不一致よりもさらに重要であることを指摘する。詳しくは、“The Ghostly Signs of *Bleak House*,” *Nineteenth-Century Fiction* 34, no.3 (December 1979): p.253 (後に、*Critical Essays on Charles Dickens’s Bleak House*, ed. Elliot L. Gilbert [Boston: G.K. Hall & Co., 1989], p.143 以下に所収)を参照されたい。

⁷ Derrida, *op. cit.*, p.112.

⁸ *Ibid.*, p.113.

⁹ 原英一氏は、19世紀の読者が私生児の問題や名前がないということの問題について現代の読者以上に敏感であったと考えられることや、それゆえに、18世紀、19世紀の多くのイギリス小説が名前の問題にかかわっているのだと論じている。詳しくは“Name and No Name: The Identity of Dickensian Heroes” in *Studies in English Literature*, English Number, 1982, p.24.を参照されたい。

¹⁰ William Axton, “Esther’s Nicknames: A Study in Relevance,” *Dickensian* 62:3 (1966) p.158.

¹¹ Axton, *op. cit.*, p.159.

¹² Katherine Cummings も Esther がニックネームによってアウトサイダーと同一視され異端者のカテゴリーに入れられることを論じている。

詳しくは、“Rereading *Bleak House*: The Chronicle of a ‘Little Body’ and its Perverse Defense” in *Telling Tales: The Hysteric’s Seduction in Fiction and Theory* (Stanford: Stanford University Press, 1991) p.199.を参照されたい。

¹³ Bruce Robbins, “Telescopic Philanthropy: Professionalism and Responsibility in *Bleak House*” in *Nation and Narration*, ed. Homi K. Bhabha (London and New York: Routledge, 1990) p.220.

¹⁴ *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes* ed. Iona and Peter Opie (Oxford: Oxford University Press, 1997) p.53.

¹⁵ J.Hillis Miller, *op.cit.*, p.191.

出典：『神戸英米論叢』16号（2002年9月）pp. 1-17.